

海のアンソロジー(6)

深海環境プログラム 長沼 毅 Takeshi Naganuma

「われわれは東経 137 度 15 分にいます....」

「どの子午線からです？」

この奇妙な質問は、J.ヴェルヌの『海底二万里』（荒川浩充訳、創元推理文庫）に出てきます。謎の潜水艦ノーチラス号の船長ネモとアロナックス教授の会話の一場面です。『海底二万里』が執筆されたのは 1869 年のことですが、当時はまだ、国際的に統一された本初子午線（経度 0 度）がなく、各国が様々な本初子午線を用いていたので、「どの子午線？」という質問は、国籍などを知る手掛かりになったのです。ちなみにネモ船長の答は、アロナックス教授（フランス人）への敬意を表してパリ子午線とのこと、手掛かりは得られませんでした。

ここで本初子午線（primary meridian）の歴史を簡単に綴ってみましょう（D. Howse 著 Greenwich Time, Oxford University Press, 1980 による）。まず、紀元前 2 世紀にギリシア人のヒッパルコスがロードス島の子午線を、紀元後 2 世紀には C. プトレマイオス（英語ではトレミー）がカナリア諸島の西端の子午線を、それぞれ本初としました。その後、ヨーロッパは中世を経て大航海時代を迎え、コロンブスの“新大陸発見”の翌年（1493 年）には、「教皇子午線」が定められました。これは、ポルトガルとスペインの間で、“新発見地”の勢力圏分割のために、ローマ教皇が「大西洋上のある子午線を境に、東をポ

ルトガル、西をスペインの所領とする」と定めたものです。翌年、ポルトガルの抗議により、この境界が千数百キロ西へ移されました（トルデシリャス条約）。これにより、新大陸のうち、ブラジル地方がポルトガル領になりました。また、地球の反対側では、（改正された）教皇子午線は日本の岡山辺りを通っていたので、日本がポルトガル・スペインの領土争いの中になる可能性もあったわけです。

本初子午線は、国際子午線会議（1884、米国）で国際的に統一されました。当時は、十数もの本初子午線が用いられており、国際的統一への気運が高まっていました。この会議には、日本を含む 26 カ国が参加し、賛成 22 票（日本を含む）を得たグリニッチ子午線が本初子午線に定められました。

ところで、『海底二万里』は、ノーチラス号がノルウェー西北沖で、メエルシュトレームという大渦巻きに吞まれて行方不明になるところで終わります。この大渦巻きについては、E. A. ポオが「メエルシュトレームに吞まれて」という短編を書いています（『ポオ小説全集 3』、創元推理文庫）。少し誇張されていますが、その一節をご紹介します。

忽然... 直径一マイル以上もある円になった... 水平線におよそ四十五度の傾斜をなし、ゆらめきながらめまぐるしくもまわり

まわり、なかば悲鳴をあげ、なかば怒号し、
ナイアガラの大瀑布が天にむかってあげる苦
悶の声すらおよばぬような物凄い叫びを風に
託しているのだった。(小川和夫訳)

この大渦巻きは実在しており、米国政府刊行の
『ノルウェー北西岸および北岸航海指針』に記載
されているそうです。浅学にして私はこの邦訳の
有無を存じませんが、抄訳程度なら R. カーソン
著『われらをめぐる海』(日下実男訳、ハヤカワ

文庫)で読むことができます。

最後に、ネモ船長の海への思いを聞いてみるこ
とにしましょう。

「海がお好きなのですね、船長」

「ええ！好きですとも！海は全てです！... 海
の呼吸は清らかで健康的です... 海は活気と愛
です... 生命をもつ無限です... 海のなかで、
わたしは自由なのです！」

SHINKAI 2000

